

中

中央線にまだ特別快速がなかった時代、新宿駅から47分の豊田駅近くに敷地面積40万坪の団地が完成した。日本住宅公団が開発した多摩平団地である。

この多摩平団地の入居が始まったのは今からおよそ53年前、1958年10月のことだ。駅から徒歩10分圏内に賃貸住宅2800戸ほどの「町」が出現。敷地には幼稚園から小中学校、郵便局、診療所、スーパーまでが揃い、日々の暮らしは団地内で完結できた。

55年に発売した日本住宅公団の目的は、深刻な住宅不足を解消することだった。初めて手がけた金岡団地（大阪府堺市、56年4月入居開始）以降、続々と大規模団地を開発した。とはいえ、箱型の建物が隙間なく詰め込まれたわけではない。建物と建物の間には芝生や植え込みが造られ、2階建のテラスハウスも建設された。団地には、効率一辺倒では考えられないゆとりが感じられた。

58年10月入居用の多摩平団地の

住宅より高い。ステータスを感じながら割高な出費を避けられる団地の登場は、人々を強く惹きつけた。

◆三種の神器と「ダンチ族」

58年7月20日号の週刊朝日に、こんな特集が掲載されている。

「新しい庶民」ダンチ族「アパート住いの暮しの手帖」

記事では、団地に入居した「ダ



多摩平団地のキャッチフレーズは「富士が見える」

高嶺の花「団地暮らし」 東京・多摩平団地(1958年◆昭和33年)

新田匡史
にった・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の「暮らし」と「まち」

案内パンフレットには、第1次募集の686戸のうち、7割の482戸にダイニングキッチンがあると書かれている。

◆DKで「食寝分離」へ

それまでの庶民の住宅は非常に狭く、茶の間で食事をしたあとにちゃぶ台を片付け、同じ部屋に布団を敷く生活だった。それに対して、新たに登場した団地にはキッチンにテーブルを置くスペースがあった。このダイニングキッチンを含む2DKという間取りが団地のセールスポイントとなる。戦後訴えられてきた「食寝分離」が実現され、それ以降の生活スタイルのスタンダードとなった。

すべての住宅にステンレス流し台と風呂、水洗トイレも完備していた。団地には最先端の住宅設備が整えられ、清潔で明るい生活を送ることができる。人々は団地に入居することを熱望した。

だが、パンフレットを見ると庶民にとっては高額な家賃が並んでいた。登場したテレビに人々は魅了された。プロレス中継などを見るため、テレビのある家庭に人が集まるといふ習慣が定着していた。

人気番組「事件記者」が始まったのは58年のこと。激しい取材合戦を繰り返す新聞記者の群像が描かれ、最高視聴率47・1%を記録した。さらに人気だったのが同年2月放送開始の「月光仮面」である。この番組は最高視聴率60・8%という数字を叩き出し、放送時間帯には子どもの姿が町から消えると言われた。何とか番組を見ようと、住民は団地の部屋から部屋を歩き来したという。

白黒テレビは別格として、記事は「ダンチ族の家庭電化はかなり高度に進んでいるようだ」と結んでいる。だが、電化製品の急速な普及を想定していない団地にはコンセントが足りなかった。念願の電化製品を買っても近くに挿し込むところが無い。コンセントにタコ足が付き、床にコードの束が這っているほど、電化が進んだ証だ

いた。公務員の大卒初任給が約1万円、銀行員でも1万数千円だった時代、2DK(43㎡)の部屋が5500円、3K(49㎡)になると6300円だという。

高度経済成長による所得増加の恩恵は、いまだ国民すべてに行き届かず、団地の家賃は気軽に払える金額ではなかった。50年代の庶民にとって、団地に入居するのは一種のステータスだった。

団地の入居資格には「月収が家賃の5・5倍以上」という項目もあった。5500円の部屋に入るには、3万円以上の月収が必要となる。当時、月3万円を稼ぎ出すのは然るべき肩書きを持った30代以上のサラリーマンが中心。団地が憧れの存在と言われた理由はここでも証明できる。

ただ、当時の資料を見ると、時おり「闇家賃」「闇相場」という単語が登場する。住宅難の時代、一般の賃貸住宅は入居者の足元を見た割高な物件も多かった。団地の家賃は闇家賃より安く、公営

ったのかもしれない。最先端だった多摩平団地も、40年が経過し老朽化が進んだ。住民が建て替えに合意し、現在は多摩平の森として生まれ変わった。

一部には、当時の建物を生かして団地を再生させたものもある。敷地のゆとりを活用して専用庭を併設し、菜園や貸し庭を設けたファミリー棟。1階の壁を取り払ってキッチン付きの共用スペースとし、2階を個別の部屋としてシェアするシェアハウス棟は若者に人気だ。エレベーターを増築して各部屋に呼び出しブザーを付けた高齢者棟では、1階の食堂が交流の場となっている。

団地の再生により、新たなコミュニティの芽が生まれた。高齢者棟のイベントにシェアハウス棟の若者が参加するなど、世代を超えた交流が広がりは始めている。

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社